

怪盗対名探偵

高電圧・長距離送電がもたらした電気照明のまばゆい世界。

松田ばこん

小学生の頃、児童書のいわゆる「ルパンもの」や「ホームズもの」に夢中になった人は多いだろう。モーリス・ルブランが生み出した怪盗アルセーヌ・ルパンと、コナン・ドイルが創造した名探偵シャーロック・ホームズだ。クラスを二分して「どっちが強いか？」という大論争をやった記憶はないだろうか。

いったいどちらが強いのか？

ご存じのように「ルパンもの」には『ルパン対ホームズ』という二人の対決編がある。探偵がまんまと出し抜かれることからルパンに軍配が上がりそうだが、当時すでに人気のあったホームズを、ルブランが勝手に登場させたにすぎない。ドイルの抗議を受けて、やむなくエルロック・ショルメスという別人に書き直された。そんなわけで、この作品はいわゆる「ホームズもの」のパロディとして位置づけられている（欧米ではあくまでも「ショルメス」として刊行されていて、「ホームズ」となっているのは日本ぐらいらしい）。

実際、そこに描かれている人物像は、表面上はともかく内面的にはホームズからかけはなれていて、魅力にも乏しい。ファンならずとも、これをもってホームズの負けとみなすのは納得がいかないだろう。

では、この夢の対決が実現すれば？

まあ、両者とも多くのファンに愛されているだけに、そう簡単に結論は出せないだろう。万人が納得する対決方法や判定基準があるとは思えない。

そこで、総合的に評価を下すのではなく、彼ら二人に共通する特技を比較して優劣をつけてみたい。

変装術だ。

ルパンといえば神出鬼没の変装の名人だし、かたやホームズも犯罪捜査に得意の変装術を駆使している。怪盗だろうが名探偵だろうが、どちらの商売にも欠かせないコンピテンシーというわけだ。強さを比べるには恰好の素材といえるだろう。

では、どちらの変装がより巧みなのか？

両者とも、変装を見破られることはめったになかったようだから、結果からみれば、ルパンならずとも「引き分けですね」（『ルパン対ホームズ』より）となりそうだ。

しかし、同程度に見破られなかったとすれば、ルパンの優勢勝ちとみることもできる。というのは「変装の見破られにくさ」という点で、ルパンが圧倒的に不利な状況に置かれていたからだ。

ルブランが『ルパン対ホームズ』を書いたことから分かるように、二人は同時代人といっても差し支えないが、活動時期がまったく重なるわけではない。ルパンが活躍したのは「ベルエポック」のバリであり、一方、ホームズは「ヴィクトリア時代」のロ

ンドンだ。ルパンの全盛期が20世紀初頭だとすれば、ホームズは19世紀末なのである。実際、熱心なファンの年譜によると、ホームズは1903年にはベーカー街を引き払ってサセックス州に引退しているから、1905年に登場したルパンとは対決できないことになる。

こうした活動時期の微妙なずれが、二人を取り巻く環境をまったく違ったものにしてしまったのである。

1879年。米国の発明王トーマス・エジソンは、白熱灯を40時間連続して点灯させることに成功した。いわゆるエジソン電球の発明だ。

それだけではない。白熱電球の実用化に欠かせないソケットやスイッチも考案し、さらには発電設備も製造して、電気の供給会社まで設立した。電気が利用できなければ、白熱電球の需要も生まれないからだ。

こうして1882年にはニューヨークで電気事業をスタートさせ、「電気をつくって売る」という電力会社のビジネス・モデルをつくりだしたのである。欧米各国で生まれつつあった電灯会社は、この仕組みの販売権を買うことで、電気照明を広めていった。

とはいっても、一気に普及したわけで

はない。白熱電球はまだ高価であり、電気料金そのものもガスに対抗できる値段ではなかったからだ。一部の歓楽街やホテルなどで使われるにすぎず、照明の主流はガス灯であった。

大都市ロンドンとて例外ではない。

立ち込める霧の中、行き交う辻馬車や四輪馬車をオレンジ色のガス灯がほのかに照らし出すという光景がいまだに続いていた。大都会とはいえ、夜ともなれば闇が支配する世界だったのである。

となれば、ホームズにとって、屈強な船乗りや敬虔な牧師に変装するのは、それほど難しいことではなかったはずだ。それらしい服装に着替えて、若干のメーキャップを施し、少しだけ声色を変えれば、ままと他人になりすませたに違いない。

電気の需要は増していったが、それにつれてエンジンの採用した直流方式の限界が見えてきた。低圧の直流では、電気の供給地域がせいぜい1~2kmの範囲であることが事業拡大の壁となった。この方式では、市街地のいたるところに発電所を設ける必要があるからだ。

この問題を解決したのが交流方式だ。

1887年、ロンドン近郊のデッドフォードに世界初の交流火力発電所が建設され、高電圧を10km以上離れたロンドン市街に送ることに成功した。

米国でも、交流技術に注目したジョージ・ウェスティングハウスが、エンジンの下で一時期働いていたニコラ・テスラの多層交流送電技術を採用。1893年のシカゴの博覧会で、交流発電機により会場内を明々と照らすことに成功した。さらに1896年には、ナイアガラの滝に交流水力発電所を建設し、35km離れたニューヨーク州

バッファローの市電や工場に電力を供給した。高電圧の長距離送電を実現したのである。

こうして1890年代から、交流による都市の電化が世界中で進み、20世紀に入ってから、電気は遠く離れた火力発電所や水力発電所から送られてくるのが当たり前となった。人々は、照明や動力に惜しげもなく電気を使いはじめようとしていたのである。

ルバンが登場したのは、まさにこの時代だ。パリをはじめとする大都会では、まばゆいばかりの電気照明が街並みや室内を照らすようになっていた。

巧みに変装しようとするれば、ガス灯の時代とは比較にならない高度な技術が必要としたはずだ。かりにルバンがホームズと同程度に変装を見破られなかったとすれば、ルバンの勝ちとみなすのが公平だろう。

ただ、ホームズは1903年に引退したとはいえ、その後も依頼があれば探偵業にもどることもあった。「最後の挨拶」は第一次世界大戦直前の話だが、このときはドイツ人スパイの協力者にままとなりすましたほどだから、煌々と輝く電気照明の下でも巧みに変装したに違いないと考えることもできる。

この勝負、やはり「引き分け」というところだろうか。

【参考文献】

志村 嘉門『電気事業事始め 電力技術物語』日本電気協会新聞部
アンドレ・ミラード『エンジン発明会社の没落』朝日新聞社
モーリス・ルブラン『ルバン対ホームズ』岩波書店

送電システムの確立が電気の普及をもたらした。